

はなむけの言葉



総長・学長

ながい
永井
かずゆき
和之

人生に幸多きことを切に願う。

卒業生諸君、諸君の胸に去来する感慨はどのようなものであろうか。充実した学生生活の思い出か、または将来への胸の高鳴りか、色々である。青年は大いなる夢を追うべきである。

卒業する学生諸君の多くは、これからの社会において、学生時代とは較べようのない大きな試練を味わうことであろう。そのような試練は、

人生の中でどこで遭遇するかという

時期が異なるだけで、誰しもが長い人生において絶対遭遇することであると思う。その中でも、人の多くは、自己の労働力・能力をもって社会で生きていかなければならない。その人のできる限りの挑戦をするしかない。挑戦しなければならぬ。この地球、どこでも生きていける。どこでも活躍する場がある。そんなチャレンジを心がけて欲しい。

しかし、また、社会からは社会への貢献が期待されているのも事実である。そこで卒業生諸君には宮沢賢治の「雨ニモマケズ／風ニモマケズ」を時には思い浮かべて欲しいと考えている。この「詩」が記された賢治の手帳は「雨ニモマケズ手帳」と呼ばれるそうである。私自身、この「詩」に時々思いを馳せることがある。また、学生達のボランティア活動の場において、この詩を読むことで、私の考えるボランティアの精神を表現することももある。何もこと改まる必要のない精神である。

君たちの母校中央大学も、現在グローバル・ユニバーシティーへの道を進んでいる。創立125周年を迎えた本学の今後進む道はグローバル・ユニバーシティーへの道である。世界中から優秀な学生が集い、世界に優秀な人材を輩出する大学へ変貌するということである。そこで問わ

れるのは、世界水準から見ても、トップクラスの研究に裏付けされた教育水準ということになる。例えば、昨年、国連のアカデミック・インパクトに登録した本学理工学部を中心とした「水プログラム」は、まさにその嚆矢ともいふべきものである。卒業生諸君にも将来、今後の社会人としての経験を活かして、このプログラムに参加される者が出てくることを期待している。そして、水プログラムだけではなく、本学のグローバル・ユニバーシティーそれ自体に参加される卒業生を待っている。

君たち卒業生が歩む道は色々であるが、母校中央大学は、君たち卒業生が、この本学の学生として学生生活を送った誇りをもって、これからの君たちの人生をおくることを確信している。そんな全ての卒業生にエールを送る。

「はなむけの言葉」に加えて

総長・学長 永井和之

2011年3月に母校中央大学を卒業する諸君が手にする『Hakumon ちゅうおう』に、私は「はなむけの言葉」と題する一文を記しました。また同誌には、多くの教員から、卒業生諸君に向けたメッセージが寄せられています。

本来、卒業生諸君は、陽春の光の中で開催される卒業式・学位授与式の式典会場において、これらのメッセージを受け取るはずでした。しかし、2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖大地震とそれに引き続く未曾有の災害により、多くの人々が被災し、諸君の卒業・修了の日である3月24日・25日・26日においてもなお、万を超える人々の安否が明らかとなっておりません。また、本学が所在する東京においても、電力や公共交通機関等の社会基盤が不安定な中、多くの人々が被災者のために何ができるかを考え、努力し続けています。

こうした中、本学は、2010年度第128回卒業式・学位授与式について、例年のように卒業生・ご父母・教職員が一堂に会して行う形式で行うことを取りやめ、また、専門職大学院の修了式についても、実施方法を変更しました。学部卒業生と専門職大学院を除く大学院博士前期課程修了生の諸君には、式辞・祝辞と総代に対する卒業証書・学位記の授与の様子を本学ウェブサイトを通じてご覧いただくほか、後樂園キャンパスにおいては24日、多摩キャンパスにおいては25日の卒業・修了の日に、諸君と数年間を共にした教員から卒業証書・学位記を受け取ってもらいたいと思います。また、専門職大学院を修了される諸君には、24日と26日に、それぞれのキャンパスで指導にあたった教員から修了証書・学位記をお渡しします。

私は、「はなむけの言葉」の中で、「（諸君に対しては）社会への貢献が期待されているのも事実である。そこで卒業生諸君には宮沢賢治の『雨ニモマケズ／風ニモマケズ』を時には思い浮かべて欲しいと考えている。（中略）私自身、この『詩』に時々思いを馳せることがある。また、学生達のボランティア活動の場において、この詩を読むことで、私の考えるボランティアの精神を表現することもある。何もこと改まる必要のない精神である」と記した。もとより、この一文は、決して今日のような状況を予期して書いたものではない。しかし、まさに今こそ諸君には、岩手に生まれその地を愛した賢治の「雨ニモマケズ／風ニモマケズ」を思い浮かべて欲しいと、あらためて思う。

私たち一人ひとりが、未曾有の災害を前にして行いうることは、本当に限られている。若い卒業生諸君であれば、なおさらであろう。しかし私は、人が「サウイフモノニ／ワタシハナリタイ」と願い、祈り、わずかばかりの行動をはじめれば、その先には必ず陽春があると信じる。中央大学は、そうした諸君の母校として、常に諸君と共にある。

あらためて、卒業生・修了生諸君に「はなむけの言葉」を贈る。